

2023年6月の総評に代えて

○林 桂○

●桜望子●(山形県 29歳)

悪意に鈍感になるな
木下闇を通る
洗い立ての白シャツが
こんなにも青く見える

【評】木下の暗がりを通るとき、白いシャツは木の葉の緑の影に染まる。かくも簡単に自分の純白は冒される。「悪意に鈍感になるな」は、自分への戒めの言葉。私たちはいつも身構えながら生きていかなければならない。

●長谷川柊香●(宮城県 24歳)

星々の溶け出す眼鏡拭きをれば

【評】眼鏡を外したときのぼやけた世界に、星々は溶けている。眼鏡使用者のあるあるだ。

●雨傘うみ●(愛知県 34歳)

換気扇の雨音
ふたりきりになる

【評】換気扇を通して聞こえる雨音。恐らく夜なのであろう。「ふたり」を寂しい男女としてもよいが、母子、父子、兄妹などの家族と考えたい。「換気扇の雨音」だけでドラマの一場面を描くような力がある。

● 松下 誠一 ● (東京都 20歳)

山菜というから信じたんですよ

【評】見なれぬ野菜を、「山菜」と言われて手にしたのだが、どうも違っていたらしい。私たちがいとも簡単に信じてしまう回路のひとつを見せてくれているようだ。

● ビスコ ● (愛知県 48歳)

父親参観日
拙い作文をいつも
褒めてくれたから
今でも書くことが大好きだよ

【評】父親を亡くされたのだろう、その回

顧の作品が連作のように続く。父子家庭のように描かれている。どれもいい。やさしい父だけは、どんな時も自分の作文を褒めてくれた。それが今も書くモチベーションとして生きている。父を想い描くことに繋がっている。二重の感謝の思いがある。

● 青野陽 ● (熊本県 20歳)

壁越しに初めて父の歌を聴く
二人暮らしがひと月目の夜

【評】ゆえあって、父との二人暮らしを始めたのだ。一緒にいるときの父の心の動きは見えないが、隣室で一人になった父の歌声で、父の心を少し覗いた気になる。父子関係のあわいを見事に描く。

● 小林紅石 ● (埼玉県 57歳)

君の香を夢に持ち込み夏薊

【評】夢は映像ばかりではないらしい。夢の中の香りこそ最も「君」を感じさせていたものなのだろう。「夏薊」との取り合わせも効いている。

● あお ● (奈良県 24 歳)

人生の喜び 苦しみ 慈しみ
キャベツを食べるウニを見ている

【評】自然環境でウニがキャベツを食べることはないだろう。多かれ少なかれ、人間がかかわっての出来事である。「人生の」は、大上段すぎるようにも思うけれども、ウニの食事風景に降りて来る心象としてみると感慨深くなる。「悲しみ」ではない、最後の「慈しみ」が効いている。

● 奎いう子 ● (佐賀県 39 歳)

平仮名がないパスワード 終戦日

【評】確かにパスワードは、アルファベットと数字の組み合わせを指定される。ひらがな不在に、PCのプログラムに日本語の不在を感じ取ったのであろう。そこから「終戦日」まで思いが飛ぶ。

● 山本先生 ● (東京都 28 歳)

人に詩がなかったとして 鳴く 蚯蚓

【評】季語にはフィクション性の高いものがある。掲示の「蚯蚓鳴く」や「亀鳴く」など。思えばこの季語自体が既に、人間の詩の表現であった。

●吉沢 美香●（宮城県 23歳）

春眠の氷砂糖の芯濁る

【評】半透明の氷砂糖。その半透明の正体は芯の濁りであると喝破。見る目の確かさと言葉への昇華力。

●マズルカ●（山口県 21歳）

佳作にも
選ばれなかった書き初めが
飾られ続ける床の間の夏

【評】家族以外の評価は関係ない。吾が子の大切な作品は、大切に家に飾られる。しかし、半年も飾られ続けるのは、いつまでも大切な思いからなのか、飾って半ば忘れられたのかの判断が微妙だ。これも家族のあるあるのよう。

●涼木 和貴●（北海道 23歳）

カブトムシの匂い
積乱雲は

【評】小学生のころの懐かしい夏休みの
感覚が定着されている。

● 貴田 雄介 ● (熊本県 36歳)

権力を演じることが上手くない
高校演劇部の演出

【評】実社会の本当の権力にまだ触れる
ことのない高校生の描く「権力」は、形式
的でリアルさに欠ける。しかし、その「下
手」さは、また愛すべきものでもあるの
だろう。

● うたた ● (岡山県 17歳)

唱和する水兵リーベ
僕たちは
海の上ではちっぽけだった

【評】「水兵リーベ」を仲間の何人かで唱
和する「僕たち」。「水兵リーベ」は、原素
記号とその配列を覚えるための歌であ
る。テンポの速い明るい曲だ。しかし、そ

の心底に自分たちの「ちっぽけ」さを感じてもいる。本当にこれは歌いたい歌なのか。学校教育の暗記の場に晒され、受験の場にも晒されている。唱和は、それに耐えるように熱を帯びる。「僕たち」は、大海原のどのあたりにいるのだろうと。